
六番めの善鬼

森野青果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六番めの善鬼

【Nコード】

N1464Z

【作者名】

森野青果

【あらすじ】

見た目は美少年だが、三百年ほど生きた老魔法使いのぼく。全盛期には王国を滅ぼしかけたけれど、さすがに最近魔法力の衰えを感じ始めている。長年連れ添った五匹の使鬼たち（見た目は美女・美少女揃い）も反抗的になってくる。そんなある日、使鬼たちを解放たなければ、いよいよ命が危ないと告げられる。しかも彼女らは契約を解除されたたん、長年こき使われた恨みを晴らすため、ぼくに襲いかかるだろう。五匹とも使鬼としてのレベルは最強だ。そこでぼくは、六番めの使鬼と契約を結ぶことにした……

ザ・ザの小砂漠を半分わたったところで、月が二つあらわれた。ぼくはガルシアを止めて、斜め前方に起立する岩の上へ目をこらした。蜜蟻酒は好物だが、今夜は一滴も飲んでいない。なのに何度目をしばたかかせても、月は二つあるようにしか見えなかった。

宮廷の博士どもがこれを見たら、世界の終わりだのアル・ル・タジール王国の破滅だのと、大騒ぎしたに違いない。

もっとよく見るために、ガルシアから下りて、さらに数歩あゆみ寄った。

風がぱたりと止んでおり、マントは少しもはためかない。空気は澄んでいて、星が瞬くさまがよくわかる。こんな夜なら、あのいやらしい砂蟹どもが這い寄ってきたとしても、気配でわかるだろう。ぼくだって、一晩かけて骨にされるのはごめん。

眺めているうちに、月の一つが瞬きした。

「円眼鬼か」

そんなことだろうと思った。どこの誰かは知らないが、趣味のよくない術者が放った使鬼ではないか。

もちろん円眼鬼がザコだというつもりはない。こいつを使いこなす術者は、かなり強力なミワの持ち主でなければならぬ。とはいっても、

（趣味がよくないんだよね。古代語を使えば、スタイリッシュじゃないってことさ）

あんなごつごつした化け物と、自身のミワを同調させるやつのが知れない。

円眼鬼は筋肉隆々・フンドシー丁の巨人で、つるんとした頭部のてっぺんから、フィン族みたいな辮髪をたらし、鼻も口もない顔の

真ん中に、巨大な真円形の眼をそなえている。ばかでかい斧を所持しており、五マリートくらいの高ならば、一撃で打ち砕く。

(まったく、趣味がよくないんだよね)

溜め息をついた。

ちなみにぼくが命を狙われる理由なら、星の数ほどある。三百年ほど生きてきたが、悪行三昧の人生であった。もともと、最近はずがにミワの衰えを感じて、ずいぶんおとなしくしているが。全盛期には、アル・ル・タジール王国を滅亡寸前まで追いこんだこともある。

「トシはとりたくないものだ」

自慢じゃないが、見た目は若い。花も恥らう紅顔の美少年。そのじつ、厚顔無恥な老魔法使いのだけど。

再び月が瞬いた。やれやれとつぶやきながら、ぼくは左手の指を伸ばし、手の甲を面前にかざした。五本の指には、それぞれ五色の石をあつらえた指輪が嵌まっている。親指から始めて、黄、赤、紫、青、緑……痛みを覚えたように、ぼくは眉をひそめた。

めまいがする。

いよいよミワが使鬼の靈力に、耐えきれなくなっている証拠だ。

こんなことなら、剣術使いの護衛でも雇っておくべきだったが、筋肉隆々・フンドシー丁の刺客を前にして、今さら悔やんだところで始まらない。ぼくは右手の人さし指に中指を添えて、指輪の一つに触れた。刺すような痛みとともに、黄金色の火花が散った。

「アル・ミーム・ミール・ワーフ。偉大なる夜の支配者。暗黒の王の御名において、我は望み、我は求む。炎と血の精霊、サラマンドルの眷属。ミランダをここに召還せんことを」

指輪が灼熱し、閃光が弾けた。

紅蓮の炎が噴出し、中空で渦を巻いた。

炎はのたうちながら蛇と化し、トカゲと化し、やがてほっそりとした一人の女の姿を描いた。腰まで届く真紅の髪。額と首と左腕に巻かれた黄金の飾り輪。美しい体の線もあらわな赤いドレス。その

スリットから、ほっそりとした脚を覗かせている。

ミランダは左手を軽く腰にあて、右手に炎の剣を引っさげて、中空から青い瞳でぼくを見下ろした。

「あそこにいるの、円眼鬼でしょ。いやよ、わたし。フンドシ野郎の相手なんて」

ミワが弱まると、使鬼もやたらと反抗的になってこまる。全盛期にはずいぶんいたぶって、いや、可愛がってやったものなのに。

「余計な口をきくな。おまえは黙って命令に従えばいいんだ」

「あんだこそ、だれに向かって口をきいてるつもりなの、ピア樽」

「お仕置きされたいのか」

「ふん」

鼻で笑いやがった。ちなみにピア樽のことを、タジール公領の方
言で「フォルスタッフ」と呼ぶ。これがすなわち、ぼくの名である。
ミランダが剣を振り上げ、軽く振り下ろすと、刀身の炎がほとば
しり、一匹の大蛇と化して突き進んだ。こちらへ向かって、だ。ぼ
くは素早く水冷の呪文を唱え、マントをひるがえした。

眉毛が少し焦げた。もう少し対応が遅れたら、美少年の丸焼きが
湯気をたてていたところだ。

「殺す気か！」

と叫んだものの、我ながら愚問だった。今の一撃は勢いこそ弱か
ったが、完全にぼくをロックオンしていた。要するに、殺る気満々。
さてこうなると厄介だ。今夜の彼女はことさら機嫌がわるいし、
ぼくのミワも予想以上に弱まっている。ミワが弱まれば、使鬼を束
縛する力も減少する。大魔法使いだなんてうそぶいているが、しょ
せんは生身の体。使鬼とタイマン張ったところで、勝ち目なんかあ
るわけがない。

(へレナを呼び出すか……)

薬指に嵌まっている青い指輪を横目で眺めた。

五匹の中では最も温厚なへレナだが、血も涙もない悪鬼であるこ
とに変わりはない。ミワによって拘束されていればこそ、命令を聞
くわけで、こんな状態で呼び出せば、ミランダとタツグを組んで襲
ってくる可能性が高い。いや、ぜったいに襲ってくる。

そんなぼくの窮地を救ったのは、意外にも円眼鬼だった。

「後ろだ、ミランダ！」

三マリートはゆうに越える巨体が大斧を振り上げ、図体からは信じがたい素早さで、彼女の背後にせまっていた。真円形の一つ目が、呪われた鏡のようにきらきらと輝いた。

「言われなくたって！」

彼女は振り返りざま、炎の剣をひと薙ぎした。閃光が巨人の胸を直撃した。爆音とともに炎が渦を巻き、円眼鬼はおぞましい悲鳴を上げながら、後方に吹き飛ばされた。そのまま背中中で巨岩に突っ込み、ばらばらに打ち砕いた。

澄みきった夜空の下、ミランダは踊るように身をひるがえした。赤く発光する髪がなびき、緋色のドレスから、白い脚があらわになった。生意気なやつだし、さっきは殺されかけたが、じつに美しい使鬼というものは、こうでなくてはいけない。

「仕留めたか」

「冗談でしょう。相手が何だと思ってるの？ そんなことも感知できなくなっただんじゃ、あんたもそろそろおしまいね、フォルスタツフ」

「ご主人さまだろう！」

痴話喧嘩している間に、崩れた大岩の塊が四方へ弾け飛んだ。ラマ王の彫像のように円眼鬼が立ち上がり、雄叫びを上げた。さっきの一撃で腹がざくりと裂け、傷口から蒼い炎が吹き出していた。片手で斧を引きずりながら、よろよろと歩き、一つ目に憎悪をみなぎらせた。

ミランダの瞳に、世にも高慢な侮蔑の色が宿るのを見た。使鬼は飼い主に似るといふコトワザは、あながち嘘ではない。彼女は優雅に腕を振り上げ、片膝を立てた。いにしえの女神像をおもわせる、「終撃」の構え。

野獣の咆哮にも似た雄叫びを上げながら、円眼鬼は地を蹴って駆けだし、宙に踊り上がった。見る間に距離が縮まったが、ミランダは微動だにしない。巨人は背後になびいた大斧を片手で引き寄せるようにして、水平に切りつけた。

血の色をした炎が、夜空で弾けた。

次の瞬間、炎に包まれた円眼鬼の上半身が、くるくると回りながらはるか彼方へ飛んで行くのを見た。残りの半分がどうなったか、知るよしもない。ひとつだけわかっているのは、円眼鬼を送りこんだ術者が、今ごろ苦しみのたうちながら、あの世への旅路を急いでいるだろうこと。

使鬼の敗北は、即座に術者の死を意味する。相手を抹殺するためを送りこんだ力が、すべて自身に跳ね返ってくるからだ。

月は一つになっていた。さっきより数倍に膨らんだように思える、巨大な満月。その前にたたずんで、ミランダはぼくを見下ろしたまま、赤い唇にすさまじい笑みを浮べた。

「思い知らせてあげましょうか、フォルスタッフ。どちらがご主人さまなのか」

ル・ビヨン。首都アル・ブリスに次ぐ、王国第二の都市。

荒野に横たわる双子の竜、ロム川とレム川が街の中で合流し、また二つに分かれてゆく。痩せて神経質な姉妹。氾濫をくり返すお転婆な竜たちも、絡みあうことで力が相殺され、広く穏やかな流れと化している。

その豊富で清らかな水を利用して、広大なオアシス都市が築かれている。王国が誕生する以前から街として栄え、またかつて、ここに百年にわたって大宮司が幽閉されていたことで知られる。そのせいか、神社仏閣が非情に多く、なぜか魔術師が好んで住みたがる。

ル・ビヨンの場末といえ、カンテラ通りが南で尽きるあたり。ズ・シ横丁と呼ばれ、じめじめした土地に蜘蛛の巣のような路地が入り組み、あやしげな貧民、遊び人、悪人どもが巢食っている。この騒がしいスラム街をぼくは気に入る、ここ五年ばかり、ねぐらにしている。近所の連中はぼくのことを、ただのインチキ占い師と認識しているようだ。

「よお、フォルスタッフ。今夜はまた、いつそう冴えない顔をしているな」

青猫亭に入ると、ヒゲ達磨の亭主が目ざとく見つけてそう言った。

「悩み事があるんなら、占ってやろうか、先生」

店にひしめく酔客たちが、どっと笑う。ぼくは眉をひそめ、無言で隅のテーブルをめざした。硬い椅子に腰をおろしたとたん、背骨が引き裂かれるような痛みにみまわれた。

(くっ……！)

昨夜はあやうく死にかけた。

さいわいミランダは円眼鬼との戦闘で、彼女の思惑以上に力を使

つていたため、どうにかこうにか、指輪に押し籠めることができたのだが。おかげでぼくは、一日じゅうベッドから起き上がれず、夜になってようやくねぐらを這い出し、腹を空かしてズ・シ横丁をさまよい歩く恰好。

「ほんとうに、だいじょうぶなんですか」

酒壺と料理を手に、ロザリオが近づいてきた。三つ編みにした、燃えるような赤毛を見て、ぼくは痛みを思い出したような顔をしたに違いない。もっともロザリオはミランダの五百倍温厚で、慎み深い。あのヒゲ達磨から、こんな娘が生まれたこと自体、奇跡といえた。

ぼくが飲み食いするものはいつも同じなので、注文なしで運び込まれる。常に特上の酒をたのみ、払いもいいので、だいたいこの時間には、ぼくのために隅の席が空けてある。

「ごめんなさいね。父はああ見えても、フォルスタツフさんのこと、気にかけているんですよ。ここ最近、ずっとつらそうに見えるってわたしも、とても心配です」

ヒゲ達磨が気になっているのは、ぼくの財布のほうだろう。そう思ったが、もちろん口にしなかった。

「ありがとう。きみの顔を見たら元気が出たよ」

齒の浮くようなセリフを言うと、ロザリオは花が咲いたように、頬を赤らめた。

この娘を陥落させるのはた易い。奴隷にしてみたい気がしないでもないが、それではここに来る楽しみがなくなってしまう。五十年前なら、迷わず鎖で引き回す楽しみを選んだのだが。純真なまま眺めていたいというのは、まさに親爺趣味。ぼくもトシをとった証拠であろう。

ロザリオが立ち去ると、ぼくは切子硝子の容器に酒を注ぎ、パンをちぎって煮豆のスープにひたした。食えないことはないけれど、基本的に肉は食わない。美酒と粗食が、ぼく流の長生きの秘訣である。一人で静かに食事する習慣を知っているので、ガラのよくない

常連客たちも、この席には近づかない。

ぼくの食事を邪魔だてしたヨソ者が痛いめにあう場面を、何度も目の当たりにしているからだ。

食事を終わるとロザリオが空の器を下げ、薔薇茶を置いていった。一口飲んだところで、テーブルの上に影がさした。

見上げると、つぎはぎだらけの防水布で全身を覆った人物が、ぬっと立っていた。こちらのほうが影法師みただった。長身で針のように痩せていた。フードの中の顔は濃い影がべったりと貼りついているため、よくわからない。ただ鋭い眼光と、食み出した蓬髪だけが、影の中にいちじるしかった。

ぼくが驚いたのは、この男がまったく気配を感じさせず、ここまで近づいたことだ。

「ほかに席がなかったんでね。ここ、空いてるかね」

目の前の椅子を指さして、男はかすかに笑ったようだ。あれほど騒がしかった酒場は、一瞬で静まり返り、まわりの連中が、固唾を呑んで見守っているのがわかった。男を睨みつけたまま、ぼくは答えた。

「もちろん」

「ならば、座らせてもらおうよ。ずいぶん長いこと歩いてきたものでね」

男の声に聞き覚えがあることに、ぼくはとっくに気づいていた。だがどうしても思い出せない。自慢じゃないが、記憶力はあまりよいほうではない。

自分で言ったとおり、この男が旅を続けてきたことは、間違いないだろう。腰かけるときに、荒野のにおいと、血のにおいが少しした。相変わらずフードを取らぬまま、ミイラのように防水布を巻いた指を、テーブルの上で組み合わせた。なんとという眼光だろう。このぼくが、生身の人間に恐れを感じるなんて。

「あの……」

胸に盆を抱いた姿勢で、ロザリオは蒼ざめていた。ぼくは彼女にウインクしてみせた。びっしょり冷や汗をかいていても、カッコだけはつけたい。

「いいんだよ。ぼくと同じものをお出しして。それとも、肉がよろしかったでしょうか」

「いや、同じものでけっこうだよ。フォルスタッフさん」
ボロ布を巻いた片手をあげた。ロザリオが逃げるように立ち去ると、常連たちはホッとしたような、がっかりしたような溜め息をもらして、それぞれの雑談に戻っていった。なんだ知り合いか、といったところだろう。

男はたしかに、ぼくの名を「フォルスタッフ」と呼んだ。

「何年ぶりでしょうか」

カマをかけてみた。酒と料理が運ばれ、心配顔のロザリオが再び立ち去るまで、男は無言で指を組み合わせていた。砂漠のような声で、男は答えた。

「およそ百三十年ぶりかな。昔の話だ。忘れてしまつのも、無理はない」

男は酒壺の栓を開け、そのまま口をつけて傾けた。本当にミイラ

ではないかと疑いかけていたが、一応飲み食いするらしい。百三十年前といえ、ぼくが最も羽振りのよかった時代だ。

魔軍を率い、当時のタジール公と手を結んで、強大な王国軍を次々と蹴散らしていった。王宮を包囲して五十日後、あることがきっかけで、突然気が変わるまで。

(ここに至って包囲を解くというのか。愚かな。もし汝がそれを欲するなら、我は汝のもとを離れ、必ず汝を滅ぼすであろう)

あのときの、憎悪に燃えるヴィオラの顔が、目に浮かぶようだ。

紫の指輪に封印されている、五匹の中でも最強の力をもつ使鬼。ついに彼女は反乱を断念したが、ぼくもまたあれ以来、一度もヴィオラを呼び出していない。右手の中指に嵌められた紫のリングは、いわば「開かずの指輪」と化していた。

「思い出したかね」

「いや」

なぜ男を思い出そうとして、ヴィオラの姿が浮かんだのだろう。

乾いた笑い声をもらすと、男は両手を上げてフードにかけた。ゆっくりと後ろにずらされた黒頭巾の中から、まず白い蓬髪がばさばさと食み出した。面長な、これ以上ないほど痩せた顔。白い苔のような無精ひげ。尖った鼻と険しい眉間。幾筋もの傷が走る蒼黒い顔の中で、目だけが鉱物のように輝いていた。

「ダーゲルド……!」

声が震えた。ダーゲルド・オーシノウ。かつてのぼくの師であり、敵でもあった男。百三十年前に死んだとばかり思っていたのに……そう、彼女によって、かれは殺されたのではなかったか。もとはダーゲルドの使鬼であった、ヴィオラによって。

ダーゲルドのもとで、ヴィオラはシザリオと呼ばれていた。少年の扮装をして、戦闘時にのみ呼び出されるのではなく、平時もかれの召使のように仕えていた。

「生きていたのですか？」

むろん、目の前の男が幽鬼でも生ける屍でもないことは、わかっ

ている。他人の空似でもない。かつての洒落者が、ボロ屑のようにやつれ果ててはいるが、こんな目をした男が、二人といる筈がない。そうしてかれがダーゲルドに違いないことは、次の一言で明らかになった。

「シザーリオは元気かね」

「あいにくと。あれから一度も呼び出していませんよ」

「だが、近いうちに、いやでも顔を合わせねばならんだろう」

「何が言いたいんです？」

かれは答えず、また酒壺を傾けた。煮豆のスープはまったく手がつけられないまま、テーブルの上ですっかり冷めていた。あらかた空になった壺を置き、指で口をぬぐった。ボロ布にどす黒い血がにじむのを、ぼくは見逃さなかった。

ヴィオラを紫の指輪に封印してしまつてから、ぼくは彼女の夢を頻繁に見た。

夢の中の彼女は、必ずしもぼくを責めてはいなかった。けれどもそれは、ぼくの願望に過ぎなかつたのかもしれない。

(まだぼくを憎んでいるのか)

(我に汝を憎む理由はない)

(ミワから解き放たれないのか。自由になりたくないのか)

(自由など、しょせん幻想に過ぎぬ。人は鳥の翼に憧れるが、鳥は翼を得たばかりに、休む間もなく世界じゅうをさまよう宿命を、背負わねばならなかつた)

(まだダーゲルドを愛しているのか)

(……)

(だからぼくを、許すつもりはないのだろう。答えてくれ、ヴィオラ)

(我は使鬼なるぞ。それが答えだ)

かれが席を立つ気配で、ようやく我に返つた。

「どこへ？」

「少し外が見たい。この街は、久しぶりだ」

二人ぶんの勘定を払い、青猫亭を出ると、ダーゲルドは店の前にたたずんでいた。フードつきのマントが、重々しい影を引きずっていた。

人は死期が近づくと影が薄くなるというが、魔術師の場合は、その逆であるらしい。影の存在がだんだん強くなり、ついにはそいつに吞まれてしまう。人の道に外れた技。神というのか何というのか知らないが、光り輝く存在に背を向け、ひたすら闇の力に頼つてき

た、その報いなのだろう。

ぼくもまた、近頃では明るい月夜など、自身の影を見てぎよつとすることがあった。そいつは見知らぬ生きもののように、いつかぼくというクビキを逃れて、復讐を果たす日を虎視眈々と狙っているのだった。五匹の使鬼たちの意志を、代弁するかのように。

「ほお、ブリキの自走夜警が、まだいるんだな」

いつしか、かれと肩を並べて、淋しい通りを歩いていった。

両側の貧家の窓から、頼りない灯りが洩れているばかりだが、欠けはじめた月の影が落ちて、街路を蒼白く浮かび上がらせていた。かん、からん、と、うつろな音を響かせながら、不恰好な影が近づいて来た。ダーゲルドは、この影のことを言ったのだ。

それは古めかしい夜警の制服を着せられた、ブリキのゴーレムだった。中に機械仕掛けもなければ、人が入っているわけでもない。まったくのうつろだという。むかし、幽閉されていた大宮司を監視するために、何十体も作られ、強力な魔法によって動いていたという。

「たまに見かけますね。もはや幽霊を見たほどにも、気にかける住人はいませんよ。どこから来てどこへ行くのか。日が落ちると同時に、ふらふらとさまよい出て、クロツク鳥が鳴く頃には、いつのまにか消えちまいます」

かん、からん。

やや前屈みの姿勢で、自走夜警はぼくたちとすれ違い、右に左によろめきながら、街路の角を曲がって消えた。

ぼくたちはほとんど街外れまで歩き、丘をのぼる小道にさしかかった。月が丘を照らし、奇妙な巨獣のように見せていた。実際にかつてこの丘には、びっしりと牙の生えた口で常にニヤニヤ笑っている巨獣が棲み、人をさらって食っていたとか。今では頂上に、古代神殿の廃墟が残るばかりである。

倒れた石柱に、ダーゲルドは腰をおろした。いかにも疲れきったかれは、今にも自身のマントに押しつぶされそうだった。ぼくは突

っ立ったまま、月とダーゲルドと向き合う恰好。

「長生きなんか、するもんじゃない。生命力の強さか、それとも悪運というやつか。いずれにせよ、老醜をさらす恰好となった」

「あなたのミワは、まだ充分強力ですよ」

「気休めはいい。おのれのミワのことは、おのれが一番よくわかっている。指輪をすべて抜き取っても、このザマだからな。シザリーオが封印されたままでよかったよ、フォルスタッフ。彼女には……」

こんな姿を見せたくなかった。

という言葉を、きつとかれは飲み込んだに違いない。

「ときにフォルスタッフ、わたしの心配なら、よそでしてくれて構わないが、おまえ自身はどうなのだ？ どこまで理解している？」
「知らずに肩が震えた。やはりダーゲルドは、そのことを告げるために、はるばる荒地をわたってきたのだ。とつくの昔に死んだはずの男が。黒いフードつきのマントを身につけた、骸骨のようは風貌で。」

月が痛いほど冴えていた。

不眠症の町、ズ・シ横丁の喧騒も、ここまでは届かない。神殿の下に埋められているという、長い耳の巨獣が、含み笑いする気配まで感じられるようだ。

「昨夜は、火のじやじや馬に食われかけましたよ。円眼鬼を屠ったばかりの彼女に、です」

「おまえが悪態をついている娘に、せいぜい感謝することだ」

ミランダが、手加減してくれたというのか。円眼鬼の先制攻撃をぼくが指摘した、その借りを返したつもりか。

「だが次こそは、その減らず口ごと消し飛んでしまおうと考えたほうがいい。長年の不摂生の報いだよ、フォルスタッフ。おまえのミワは、もはや一匹の悪鬼の霊力にすら耐えられない」

溜め息がもれた。おのれのミワのことは、おのれが一番わかっている。ダーゲルドはそう言ったが、ぼくもまた心の奥底では、そのことを充分理解していたのだと思う。ただ認めたくなかっただけで。「次に使鬼を呼び出したときが、ぼくの最期だと？」

「そういうことだ」

「ヘレナでもだめですか」

「何とも言えないな。場合によってはシザーリオ……ヴィオラがおまえを見逃すかもしれない……ああ、いや。それはあり得ないか」
あり得ないと、ぼくも思う。

(我は使鬼なるぞ)

それが答えだと言ったとおり、彼女は使鬼の「掟」に忠実に従うだろう。ミワから解放された使鬼は、元の主人と対決しなければならぬ。彼女たちが霊力というエナジーの塊である以上、クビキを解かれた後の反動は自然な流れであり、算術博士どもが言うところの、「法則」に過ぎないのだから。

だからと言って、むりに彼女たちを引き留めようとすればするほど、事態は悪化の一途をたどるだろう。反動が膨れるだけ膨れ上がり、共鳴作用がはたらいて、やがては五匹とも封印を突き破り、同時に襲いかかってくるだろう。

一匹ずつでも打つ手がないというのに、こうなってはお手上げだ。もはや恥も外聞もなかった。かつての敵の前に、ぼくはさすがのように、ひざまずいた。

「どうすればよいのですか」

口の端を引きつらせて、ダーゲルドは笑ったようだ。

「そこまで生に執着するのか。三百年も生きれば、もう充分ではないか」

「充分ですよ。やりたいことは全てやったし、思い残すことは何もない。彼女たちが望むなら、八つ裂きにされても構わない。ただ、たとえ憎まれていようと、彼女たちは長年、ともに死線をくぐり抜けてきた相棒です。別れなければならぬ宿命は受け入れますが、別れたあとも、無駄口くらは叩き合いたい」

「おまえの言いぶんは矛盾だらけだぞ、フォルスタツフ」

「何百年生きようと、人間の感情なんて、しよせん矛盾だらけですよ。とにかくぼくは、こんな別れかたは気に入らないんです」

かん、からん。

自走夜警の足音が聞こえた気がしたが、むろん空耳だろう。

ダーゲルドは足もとをまさぐり、夜露に濡れた草むらから、一輪の、野生の薔薇を手折った。蒼ざめた月光にかざされると、薔薇の花弁は血の色に燃え上がった。使鬼を失ってもなお、かれのミワが

まだ充分、力を保っていることが知れた。

「ひとつだけ方法がある」

燃える花弁を一枚むしり、かれは宙に放った。それは一匹の赤い蝶と化して、月を愛でるフェリアス族のように、ひらひらと優雅な舞を演じた。ぼくは無言でそれを見つめたまま、ダーゲルドが言葉を継ぐのを待っていた。

「第六の使鬼とミワを結ぶことだ。ただし、これまでのように悪鬼ではなく、善鬼とな」

ぼくたち魔術師にとっての善鬼とは、一般人にとっての悪魔に等しい。

神というのか何というのかわからないが、そういったものの眷属であり、闇ではなく、光の世界に属する霊的なエナジーだ。例えば暗闇を這いまわる黒翅虫に、むりやり日光浴させれば、ひとたまりもないように、ぼくたちは光の眷属をこの上なく忌み嫌っている。

「冗談でしょう。いや、まったく冗談じゃない」

「そうとも。わたしは本気で言っている」

「不可能ですよ。百歩譲ってあなたが本気だとしても、善鬼なんかとミワが結べるわけがない。蠟燭にバケツの水をぶっかけるようなものです。そもそも善鬼ともあるうものが、ヨコシマな魔術師を成敗こそすれ、味方につくとお思いか？ ぼくだって、三百年ほど生きていますがね、そんな話は一度も聞いたためしがありませんよ」

「そうだろう。わたしも聞いたためしがない」

呆れて二の句が継げなかった。

この男、こんなくだらない冗談が言いたくて、病身に鞭打ち、はるばる荒野をわたってきたのだろうか。ぼくのミワの衰えを嘲笑い、かつてぼくに敗れた恨みを晴らそうというのか。おまえはもうおしまいだよ、ピア樽野郎。せいせいお祈りでもしておくんだな、と。

(ヘレナを呼び出してやる)

心の中で歯ぎしりしながら、そう考えた。彼女なら、まだぼくに従うかもしれない。使鬼を持たないダーゲルドなど、見世物小屋の魔術師にも劣る。この場で即座に八つ裂きにして、老醜にピリオドを打たせてやる。

あの強くて美しかったダーゲルド。憧れの魔術師の名を、これ以上穢さないためにも。

「ただし、秘法として伝わる以外は、な」

ぼくの癩癩が爆発する直前に、かれは口を開いた。

「秘法……ですか」

「いわゆる、口伝だよ。書き残すことをかたく戒めらておるゆえ、どんな魔法書にも載っておらぬ。師から弟子へと、ただ口頭でのみ伝えられてゆく、いわば裏技中の裏技だな」

「かつてあなたは、ぼくに伝えるべきことはすべて伝えたと、そう仰いませんでしたか」

燃える薔薇を見つめたまま、ダーゲルドは口の端をゆがめた。

「言った。あの頃のおまえに、この秘法は必要なかったし、わたしにもまた、伝える資格がなかったからな。だが今ではおまえのミワは衰え、わたしは死に瀕している。お互いに、その時期が来たのさ。それだけの話だ」

魔法は生きものだ。

かつてかれに、そう教えられた。術者が術を選ぶのではなく、術が術者を選ぶのだ。そうして今回の場合みたく、どうあがいても、その時期が来るまで習得できない魔法がある……ダーゲルドは語を継いだ。

「むろん、リスクをとまなつてこそその裏技だ。へたをすれば即座に死に至る。が、いずれにしても待つものが死であるのなら、運命に對して能う限りの抵抗をこころみたい。フォルスタッフ、おまえならきつとそう考えるだろう。違うかね？」

無言で首をふつた。ダーゲルドは花弁から目を離し、ぼくをまともに見据えた。ほとんど色素を失った瞳は、けれど月に凍る鏡湖のように、相変わらず研ぎ澄まされていた。戦慄の中で、ぼくはつぶやいた。

「教えてください。その秘法というやつを」

秘法と呼ばれるものの九割九分九厘は、贗ものであるといわれる。インチキ魔術師がシロウトの金持ち相手に法外な値段で売りつける、今も昔もかわらない商売の道具とされる。それらはやたらに煩雑な儀式をとまない、呪文は本に綴じられるほど長たらしく、一角獣の

角だのと海竜のヒゲだのと、入手困難な祭具を要求する。

要するにまったく効かないのだが、ダーゲルドの口伝は違っていた。かれががすべて語り終えたあとも、月はまだ中天にかかっていた。本物の秘法とは、それほどシンプルなものだ。

一輪の薔薇は手折られた記憶すら忘れたように、雑草の中でみずみずしく咲いていた。ただ赤い蝶ばかりが、月を装飾するように、ひらひらと飛んでいた。

ダーゲルドの姿はどこにもなかった。

自分の身は自分で守れ。守れそうにないときは、用心棒を雇うに限る。

自慢ではないが、三百年の間、悪の限りを尽くしてきたぼくには敵が多い。おまけにこの首には、莫大な懸賞金までかけられているため、命知らずの賞金稼ぎどもに、常につけ狙われている。そして使鬼が使えない魔法使いは、剣を奪われた剣術使いに等しい。

むろん、使鬼を呼び出さなくても、多少の攻撃は可能だ。

火を起こし、水を噴出させ、風をあやつる。自然界に直接作用する呪文があるし、また人形をこしらえて、下等な精霊をのり移らせ、インスタントな使鬼をこしらえる方法もある。並みの相手なら、この程度の術でも倒せるのだが、円眼鬼クラスの強力な使鬼を差し向けられては、とても太刀打ちできない。

(あいつに頼んでみるか……)

古来、魔術師は剣術使いとコンビを組む場合が多い。

攻撃力は魔術師のほうがはるかに勝っているが、例えば呪文を唱えている途中など、まったくの無防備になってしまう。またしよせん生身の体であるため、接近戦に持ちこまれては不利だ。そこで鍛えぬかれた剣術使いとコンビを組むことで、それらの欠点をカバーするのである。

三百年の間に、ぼくは何十人もの剣術使いと知り合った。かれらは当然、魔術師のように寿命が長くない。肉体の衰えは死を意味するので、むしろ一般人より短いくらいだろう。ズ・シ横丁に引っ込んでからは、かれらとのつき合いも完全に絶えた。

ただ一人だけ、「こいつは」と目をつけている剣術使いが、この界限に住んでいるのだが。

(客?)

戸を叩く音で、もの思いから覚めた。

まさに日が暮れようとする時刻だろう。鎧戸の隙間から洩れる光は、弱々しい赤で、かわりに室内の灯火が、ようやく居場所を得たように、鮮やかに色づいてゆく。身を起こすと、寝台が頼りなくきしんだ。骨がばらばらになるような激痛に襲われた。

「くっ……!」

使鬼の呪いだ。

五匹の使鬼どもが、内側からぼくのミワを突き破ろうとあがいているのだ。しかも単なる悪あがきではなく、確実にぼくの体を蝕んでゆく。彼女たちはそのことを充分理解しており、嗜虐的にぼくそ笑むさまが目には浮かぶようだ。さんざんぼくにいたぶられてきた仕返しに。

あれから三日経ったが、ダーゲルド・オーシノウの行方は杳として知れなかった。人形を使って探索させたが、少なくともこのズ・シ横丁にはどこにもいない。ならばやはり幽鬼か、幻の類いかと考えてみたものの、青猫亭の連中は、たしかにかれを見ているのだから、ぼく一人の妄想では決してない。

そうしてダーゲルドの「秘法」は、夜露とともに消え去ることなく、はつきりと記憶に刻まれていた。

煩雑な儀式もいらなければ、サラマンドルの涙だとか海兔の牙などが必要なわけでもない。召喚の呪文も簡単に覚えた。あとは、ある場所へ行ってミワを結べば済むだけの話だ。が、しかし、ぼくはこの三日間、骨の痛みを耐えながら、どうしてもそこへ赴くことができずにいた。

恐ろしいのだ。

善鬼が、光の精霊が、恐ろしいのだ。ぼくをばらばらにしようと目くるむ闇の精霊、五匹の悪鬼たち以上に。

また戸が叩かれた。

まったくこんな朝っぱらから、ではなく、日が落ちる前から魔術

師の家の戸を叩くなんて、無作法なやつである。髪を掻きむしりながら寝台から抜け出すと、靴を履き、マントを羽織って、楕円形の鏡の前に立った。目の前で蒼ざめた美少年が、眉間に皺を寄せていた。

（こんな顔ばかりしていると、たちまち老けこんでしまいそうだ）
呪文を唱えると、ぼくの顔はしだいに滲み、灰色に曇る鏡面に溶けこむようにして消えた。振り子が五往復もする間に、再び鏡は像を結び始めるだろう。それは櫛の戸板に象嵌された「眼」をとおして映し出される、扉の外の映像なのだ。

刺客ではなかった。

鏡の中で、頬を上気させたロザリオが、不安げな瞬きをくり返していた。夕陽を背景に、赤く染まったお下げ髪が乱れているさままで、はつきりと映っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1464z/>

六番めの善鬼

2011年12月24日12時51分発行